

原作脚色監督者
撮影者

帝
河伊
上藤
勇大
喜氏
キ
ス
モ
サ
マ
ヒ

水船妹夫庄蝶
瀬川銀潮子嬢

卷之三

二〇

卷之三

110

卷之三

妹お玉を己れ

の
も
の
に

せんか
せん

計量
つ一
がの
。經

主人
一七
は蝶

性をねお玉が爲めのもの。彼は水夫庄一の懲人お蝶妹をお玉を爲めのものにしてしまつた。庄一は弱い男であつたがゆえに大堂の横暴に憤りの血をわきせた——けれど腕力と金力の前には敵で難く、遂にお蝶は大堂に奪はれ、彼は船から放逐されしてしまつた。その後の大堂の船が庄一の故郷に寄港した時、お蝶は脱船して庄一に宛てた遺書を残して海に投じて死んだ。庄一は漸く故郷を離れて大堂の船をさがし求めた。そして大堂は彼女のもとへも亦、大堂に奪はれた。そうして身を汚されて丁度了つた——が彼女の純真さはさうが大堂の荒んだ心も和らげ、彼に眞の愛を解さしめた。お玉は大堂の子産な姉妹の復讐をなすべく大堂の船をさがし求めた。時は春になって大堂の船に遡る事が來した。彼は狂喜して大堂の船を襲ひ、大堂をさ決闘した。けれど大堂は庄一と戦ふ事を避け、兄弟そなまんざらで云つた。けれど庄一は絶対に大堂に向ふに忍びてお蝶の姿を窺つた。彼は船中で寝る暇も無く、その時空知怒火は船中で渦巻いた。大堂はお玉の残した可憐な嬰兒を見た。彼はお蝶を救ふ爲め火炎の中に飛び入つた。庄一も妹の死を嘆くが、や大堂の改心を知り彼を許して嬰兒の身を護つた。——呪の焰は遂に大堂の船を焼きついた。——

「何んと云ふ妥協的な譯りだらう。我等は伊藤氏の作品にこんな妥協的なものな求めたくない。アーヴィングのストラスト丈を見たらどうやら伊藤氏らしい氣分の多い事、矛盾の多い事、それ自身に又大堂やお玉の心理描寫や性格の變化を單に字幕に依つて知らしめる等、餘りに映画劇的の使い方を失却した定評ある伊藤氏が自ら監督の任を命ぜたのである。」伊藤氏が當時の業部の小説家らう共、當時るべき作品に如何に營業部の小説家らう共、斯くの如き脚本を選ぶは氏の爲め惜しむべ事ではない。前記の如く筆の心理描寫が御留守のため、お芝居タブリの活劇演畫と評するの止む無きに至つて居る現象である。

(八月廿九日、淺草遊樂館) — 山本 繼葉一